



# 2脚の椅子が跨ぐ空間と時間

## ムテサ1世のトーネット#14



小馬 徹 (神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科・教授)

### 1 文化のアポリアとプロクセミックス

ポストモダン、ポストコロニアルの人類学では、文化とは、外部の視線に媒介された反省的な視角から操作対象として「創造」されるものである。この強く構成主義的な文化観には、文化の政治性を白日の下にさらけ出した大きな功績がある。その一方で、浅薄な追随者を増長させた。人間性の根底にある捉えがたい何ものかを見つめて、それを文化の概念で捉えようとする深遠な試みをも一緒にたに拵じ伏せる、暴力性を併せもつのだ。

N. チョムスキーの偉大さは、単に唯一の超大国の暴挙を告発して止まない点にあるのではない。むしろ学問上の巨大な貢献は、表層的な文化の政治性を超えて、ヒトが種として共有する本質主義的な文化が存在すると、臆さず、怯まず論じてきた点にある。言語能力は遺伝的な本質としてのヒトの文化であり、構成主義的な文化とはその次の個々の文化の水準の選択の問題である。構成主義論者は議論の水準を取り違えて全てを政治に帰す。

こうした文化のアポリアと格闘した先駆的な研究として、E. T. ホールの「相対的な近さの学」(proxemics)を再評価してみたい。彼は、(表層の)構成主義的な文化を同一の枠組みと尺度で把握・比較できるような、「文化モデル」を作ろうとしたのだ。彼が逆説的に目指したのは、『文化を超えて』本質的な文化を把握することだったろう。ただし言語そのもの(有節言語)ではなく、「沈黙の言葉」あるいは「行動の言語」としての。

彼は、或る相手との距離の取り方や時間の処理の仕方が、言葉の裏側や意識下に隠された感情を表現していると考えて、豊富な事例を挙げ、実際的で説得的な議論を繰り広げた。互いに会話相手との適切な距離を保とうとして、学舎の40mもの廊下を端から端まで我知らず移動していた南北両アメリカ出身の2人の教授 問合いのとり方の文化的な違いから、水臭さ(前者)と馴れ馴れしさ(後者)を克服しようとして という具合に。

ただし、或る関係において何かと関わる距離や時間を調整されるのは、なにも人だけではない。物もまたそう

である。そこで仮りに、物にもプロクセミックスを当てはめてみるとどうなるか。やはり、物を或る時或る所に置いた行為者の意識下の感情や隠れた心の動きが、文化と歴史の問題として見えてくるのではないか。それが、小稿のちっぽけな問題提起である。

この視点からは、特定の個物をそれが置かれている具体的な個別状況(空間と時間)から切り離して単に或る種類の物(の内の任意の一個)として捉え、その一般的な機能や制作技術、用途、使用技術を論じる民具学とは大きく異なった展望が開けてこよう。ここでは、考察の対象は物の用具性ではなく、特定の脈絡で特定の個物が担う(意識下の)表意性、または象徴性となる。実は、或る物との退っぴきならない一つの出合いの衝撃の余韻の中で、この小文を綴っている次第。出合ったのは2脚の椅子、場所はカンパラ。2003年8月11日のことである。

### 2 王はトーネット 14に腰掛けたか?

ウガンダの首都カンパラは、ヴィクトリア湖岸の美しい高原都市で、ローマと同じく七つの丘の街と呼ばれる。キリスト教各派の大聖堂、大モスク、ガンダ王宮、かつての東アフリカの最高学府マケレレ大学(当初は高校)などの歴史的な建造物が、それらの丘から街を見下ろしている。カスピ丘には、前代まで、最近4代の王の墓廟(Kasubi tombs)がある。

ムテサ1世(ca.1835~84)は1881年にカスピ丘に宮廷を開き、1884年に没して、茸の傘を伏せた形の外観をもつ壮大な草葺きの王宮(Muzibu-azaala-mpanga)の内奥に埋葬された。次いで、ムワンガ2世(在位1884~97)、チワ2世(同1897~1939)、ムテサ2世(前代、同1939~66)の後続3王が同王宮内の彼の傍らに葬られた。参拝者と墓所を槍襖が隔て、その近くの柱には4人の肖像写真(画)が、その奥にはヴィクトリア女王寄贈のランプが掲げられている。祭壇前の向って左側面の空間には、ムテサ1世のペットだったヒョウの剥製、彼が好んだボードゲーム(omweso)板と共に、あの2脚の椅子がある。

それがアンピール様式かヴィーダーマイヤー様式のものなら、何の不思議もない。だが、何と大量工業生産時代の到来を画する永遠のベストセラー、トーネット#14なのだ。なぜこの椅子が、今ここに置かれているのか？

ガンダ王国は、18世紀にアフリカ東海岸のスワヒリ商人を仲立ちとするインド洋沿岸地帯との遠隔貿易で栄え、王はその富を独占して支配を強めた。繁栄の極点がムテサ1世の治世であり、彼は最も偉大な王として記憶されている。彼は歴代の王同様に血塗れでも、スワヒリ語とアラビア語を自在に操り、卓抜な政治的才能で際立っている。太平天国の乱制圧で武名を馳せたゴードンがエジプトの2代目「赤道州」知事として1874年に南下してくると、巧妙な外交政策で籠絡して追い払った。また、イスラム教に改宗しながら（王霊も神格となる）伝統信仰を加味して臣民の反抗にあうと大粛清し、1877年にはエジプトの帝国主義的侵攻に備えて、スタンレーを介して英国からチャーチ・ミッション・ソサエティ（CMS）を招いた。だが、1879年に王の招待なしにやってきたフランス・カソリックのホワイト・ファーザーズ（WF）も容認し、CMSやイスラム教と競わせて各派の勢力を削いだ。

ムテサ1世の死後俄かに凶暴になって殺されたヒョウは彼の神性を、並の倍の珠穴があるボードゲームは才智を、両端に穂をもつ特異な槍は王権を、ランプは致富を象徴していよう。では、トーネット#14は一体何を？

### 3 王権の表象としての椅子の逆説

トーネット#14は、1796年ドイツに生まれ、ウィーンで成功した家具職人ミヒャエル・トーネットが1859年に生み出した永遠の傑作である。彼は、赤ブナ材を（産業革命がもたらした）熱蒸気で軟化させた後、鉄製の型（治具）に嵌めて自由自在に成形・乾燥させる曲木加工を発明した。#14は、僅か6つの部材に分解するノックダウン方式で工業的な大量生産を安価に実現した革命的な椅子（最初の「消費者の椅子」）で、現在も作り続けられ、総生産数は2億脚に達している。#14は、産業革命を建築に結実させた「水晶宮」と並ぶ記念碑的な作品だった。

カスビ墓廟のトーネット#14は、件のランプと共に1877年に英国（CMS）がムテサ1世に贈ったものだ。#14の発明の背景には、時代的な要請があった。ウィーンの人口が急増して1857年に城壁が取り壊され、跡地に環状道路と沢山の住宅が作られる。そして、大量の安価で良質の家具の需要が生まれた。狭い住居に住む新住民が憩うカフェ文化を支えたのもトーネットの曲線美だった。写

真を見ると、1911年にできた東京で最初のカフェ、プランタンの床を#14が埋めている。では、ヴィクトリア女王は、ムテサ1世を侮蔑しようとしたのか。カスビ墓廟の案内本が1877年の女王の贈り物であると誇らかに明記し、しかも#14は現に遺体の側近くにある。以下のように推論になるが、確かに王が自ら望んだのだと思われる。

探検家スピークが、1862年2月20日に王と会う。日向に立たされて待つうちに恐怖に襲われて逃げ帰った彼は、椅子を持参して座る特別の勅許を得る。一時間ほど無言で対面した後、王は立ち上がり、ライオンを模した足取りで奥へと歩み去る。この時、スピークはライフル、短銃、金時計、望遠鏡などと共に鉄製の椅子も献上した。1875年4月5日のスタンレーとの初会見で、王は（恐らくこの）鉄製の椅子を彼に勧めた。自分では座らずに。

スピークがアフリカ探検に携行した椅子は、軽く、強く、美しいトーネット#14だったろう。王はそれを欲した。東アフリカに元々玉座はなかった。背板の高い玉座についた写真が残るのはチワ2世からだ。彼の治世中に英国とウガンダ協定（1900）が結ばれ、ガンダ王国はウガンダ保護領内で最も有利な地位を得たが、実質的な権力はガンダ王から首長層に移った。皮肉なことに、聳え立つ玉座は英国の傀儡としてのガンダ王の象徴なのだ。

ムテサ1世は、必要なら屈んだ臣下の背に座った。イスラム教やキリスト教を介して近代文明を熱望した王を魅了したのは、英国が与えるお仕着せの大仰な玉座ではない。産業革命の一つの精華であり、木目に抗して美しく自在な曲線を描く新時代の椅子、トーネット#14だった。あの2脚の椅子は、七つの丘のカンパラと芸術の都ウィーンを、前近代の専制王制と大量消費の近代市民社会を跨いで、今も彼の遺骸の傍近く置かれている。



ヴィクトリア女王がムテサ1世に贈った2脚のトーネット14。カスビ墓廟内の祭壇の傍近く置かれている。